

【翻刻・解題】 山陰歴史館蔵『無題歌合集』 (一)

**渡邊 健 **米子高専古文書の会

概要

ここでは、山陰歴史館が所蔵する『無題歌合集』の翻刻に解題を付して紹介する。本書については平成二十二年に原豊二氏がその概要を紹介され、今まで知られていなかった米子歌人を広く抽出し、幕末の米子歌壇の活動状況を把握する上で重要な資料であることを指摘されている。(注1)その後、稿者も本書について調べる必要性を感じながら、なかなか手がつけられずにいたが、平成二十八年十二月から、NHK学園古文書講師の中宏氏の勧めにより、稿者の所属する「米子高専古文書の会」で本書の解読が始まり、先般その作業が終了した。本稿は、「米子高専古文書の会」の平成二十八年(令和元年度)の活動成果の一つとして、本書の翻刻本文と解題を掲載するものである。資料の調査・撮影と解題の執筆は渡邊が行ったが、資料の解読は「古文書の会」が共同で行った成果である。解題には、本書の書誌と内容に関する簡単な解説を施した。

『無題歌合集』解題

本書の資料としての性格と内容については、稿者が別稿において論じ、また本書に収められた二十の歌会・歌合を対象に、参加した歌人の略歴や米子歌壇の和歌活動の状況について基礎的な調査と考察を試みた(注2)ので、そちらを参照されたい。ここではそれと重複する内容もあるが、本書の書誌等について簡単に紹介する。

一、書誌、書写者について

本書は、米子市立町の鹿島恒勇家(鹿島本家)旧蔵本で、現在は米子市立山陰歴史館の所蔵である。(米子市教育委員会整理番号「C1MG 〇二二三、〇二三二」、整理書名「無題和歌集」)本書は外題・内題共になく、書名が明らかでないが、この書物を最初に調査・報告された原豊二氏の呼称に従って『無題歌合集』と呼ぶことにする。

本書は袋綴(紙縫綴)一冊の写本で、縦二八・〇糎×横二〇・二糎、大

本よりやや大きな書型である。表紙は本文と同じ楮紙で題簽はなく、何も書かれていない。(写真1)本文は一〇二丁で遊紙はなく、第一丁目表から一〇二丁目表までに二十種の歌会・歌合が記され、一〇二丁目裏が裏表紙となっている。本文は二面八行、和歌一行書きを基本とし、歌の後にその作者の名のみ記す。(写真2)八九丁目以降は、紙数が残り少なくなってきたからか、和歌と和歌の間に「左」「右」や勝負付を記しており、無理に詰めて書写しているような印象を受ける。(写真3)

本書には、幕末に主に鹿島家で行われた二十度の歌会・歌合が記録されており、それぞれ次のように、冒頭に歌会・歌合の月日、場所、題、判者等が簡潔に書かれている。(便宜上、収録された順に丸数字を付す)

- ① 神無月朔日略会 詠歌青々庵
- ② おなじく十九日略会 滄廼舎
- ③ おなじく廿八日略会 虎嘯軒くさぐさ
- ④ 霜月二日略会 日孝
- ⑤ 兼題 橋上霜 古蔭撰

⑥ 兼題 鷹狩 古蔭喜蔭両撰

⑦ 兼題 閑居夢 古蔭撰

⑧ 兼題 馬 古蔭撰

⑨ 兼題 冬暁月

⑩ 網代

⑪ 埋火 寄山恋

⑫ 題 立春 社頭松

⑬ 雪中若菜

⑭ 山家鶯

⑮ 田家梅

⑯ 九月末つかた 喜蔭撰

⑰ 遠山雪 喜蔭武彦両撰

⑱ 喜蔭武彦両評

⑲ 題 朝落葉 炭竈 橋 喜蔭評

⑳ 兼題 立春 喜蔭武彦

本書の総歌数は、重複歌を含め一〇一四首である。右のうち、⑩の末尾に「嘉永六とせのうし」と記されているので、それぞれの歌会・歌合の行われた時期が判明する。①～⑭までは嘉永六年（一八五三、癸丑）の十月から十二月、⑭～⑱は嘉永七年（十一月二十七日に改元して安政元年）、⑲は月日は記されないものの、⑰・⑱の歌合が主に冬題であるのに対し、立春から始まる四季題で歌が詠まれているので、年の明けた安政二年正月のものではないかと考える。

本書の保存状態は決して良くはなく、経年による汚れや本の傷み、若干の虫損はあるものの、本文の解説に支障のある箇所はなかった。

本書の書写者は、その筆跡から見て、鹿島本家九代の長行（天保五年（一八三四）～明治二八年（一八九五））と認められる。⑧～⑫の歌合の本文の後には、「追加」として判者・小谷古蔭の詠歌が一、二首記されているが、他の短冊類に見える古蔭の書体とは違い、長行の筆跡である。また⑩の末尾には、「口上をしるす」として、終わりに「古蔭」とある文章があるが、

これも長行の筆跡で、文字通り古蔭が歌合後に口頭で語った内容を長行が書き記したものである。（写真4）本書にはこの他にも、⑦の8歌の後に古蔭の評言と見られるものがあり、⑧・⑨～⑫の末尾には古蔭の詠歌（⑧・⑫は詞書を伴う）があるが、いずれも長行の筆跡である。おそらく、歌合の際の古蔭の言葉や和歌を、後から長行が記したものと考えられる。

長行が本書を記した目的は、主に鹿島家で行われた歌会・歌合の記録であることはもちろんだが、表紙に何も書かれていないことから明らかかなように、おそらく公開を意図してのものではなく、私的な備忘録といったものであったのだろう。一方、嘉永六、七年に長行は二十、二十一歳とまだ若く、和歌を本格的に詠み始めたばかりであったと思われる。それゆえ本書には、和歌の初心者らしい用字・仮名遣いの誤りや誤字・脱字等が少なくなく、文字や書写態度もややルーズだと感じられるのであって、本書を資料として利用する際にはそれらの点に注意が必要である。本稿では誤脱等が想定される箇所について、【翻刻付記】に私見による訂正案を提示しているので参照されたい。

二、内容

本書に収められた二十の歌会・歌合は、その実態から次の三期に分けて把握することが可能であると考えられる。一期は①～④であり、嘉永六年十月一日から十一月二日にかけて、「歌会」が、参加する歌人の持ち回りで開く場所を決めて行われていたと考えられる時期である。参加者はもともと鹿島家と交流の深い者が多く、小規模な歌会で様々な歌題を試み、詠歌の技量の向上を目指していたと考えられる。このうち④については、この時の歌会で詠まれた歌が後日、歌合に編み直され、小谷古蔭の加判・選歌を得て成った資料が現存している。（注3）

二期は⑤～⑮であり、嘉永六年十一月から翌年春にかけて、小谷古蔭を指導者に迎え、「歌合」が行われた時期である。おそらく下鹿島家の青々庵に場所を固定して多くの参加者が集い、三、四か月の間に十一度も歌合が開かれ、米子歌壇は活況を呈した。この時期は歌合を行うことで歌人たちが切磋琢磨し、より真剣な和歌の創作が行われるようになったと見られ、

古蔭も率直かつ厳しい態度で彼らの指導に当たっていた様子がうかがわれる。

三期は⑯～⑳であり、嘉永七年九月から安政二年正月にかけて、古蔭が米子を去った後、しばらく行われていなかった歌合が、佐々木喜蔭・中林武彦を判者として再開された時期である。参加者の数は少なくなるが、身内の・同士の自由な雰囲気のもとで歌合が行われており、珍しい歌題も試みられている。

本書に収められた二十の歌会・歌合に参加した歌人のうち、名を記された者は三三人に及ぶ。その他に「名しらず」「飛入」と記される歌が計九首あるため、実際にはもう少し多くの人数が参加していたのかもしれない。本書では、歌の作者は姓はなく名のみ記されており、その大半は素性の分からない人物である。

注2拙稿において、当時の全国的な類題和歌集の作者姓名録やその他の資料を参照して参加歌人の調査を行ったが、特定できた人物のうち、商家の者としては鹿島重正・同重好、大谷兼烈、三好秀興・同秀年がいる。重正・重好は本書の書写者・鹿島長行の同族（下鹿島家）であり、兼烈や秀興は同じ米子町内の商人同士で、鹿島氏とは和歌や茶道を通じて親交があった。士分では村瀬鎮喜、森知方がおり、鎮喜は米子城家老荒尾氏の重臣、知方も荒尾家臣ではないかと考えられる。医家では中林武彦・同古樹、片尾常之がおり、武彦・常之は荒尾家臣の医師である。神職では米子天神町稲荷神社の門脇重矩・同重固がおり、僧侶では米子寺町実成寺の日孝がいる。歌人でなく判者として参加している佐々木喜蔭は米子勝田神社の神職である。

このように本書は幕末の米子において、鹿島家を中心に歌壇が形成され、活況を呈していた実態を詳細に知りうる資料である。近世後期、鹿島家が豊かな財力を背景に、米子で文化メセナの役割を担ったことはよく知られているが、本書の活字化を機に、今後は鹿島家の和歌活動についてもさらに研究が進展することが期待される。

注

(1) 原豊二氏「幕末の米子歌人―新出鹿島本家和歌資料の探求のために―」『山陰研究』第三号、平成二二年一月。

(2) 「山陰歴史館蔵『無題歌合集』について」『山陰研究』第一二号、令和元年一月。

(3) この歌合は袋綴一冊の写本で、山陰歴史館に所蔵されている。(同館整理番号C1MG0二二二)。その翻刻本文と解説は、渡邊健・米子高専古文書の会「影印・翻刻 嘉永六年十一月十日鹿島家歌合」『米子工業高等専門学校研究報告』第五三号、平成三〇年二月)を参照されたい。

* 原稿受理 令和二年一月十日

** 教養教育部

*** 米子高専古文書の会 参加者(平成二十八～令和元年度、五十音順。単年度の参加者も含む。)

坂田友広(米子高専名誉教授)

辻本桜介(米子高専助教)

東條英樹(古文書愛好家)

中宏(NHK学園古文書講師)

永井猛(米子高専名誉教授)

中原道宣(米子高専非常勤講師)

羽田成夫(元米子市小学校教員)

松崎安子(元米子高専准教授/現国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員)

山藤良治(元米子高専教授)

和田嘉宥(米子高専名誉教授)

渡邊健(米子高専教授)

(写真)

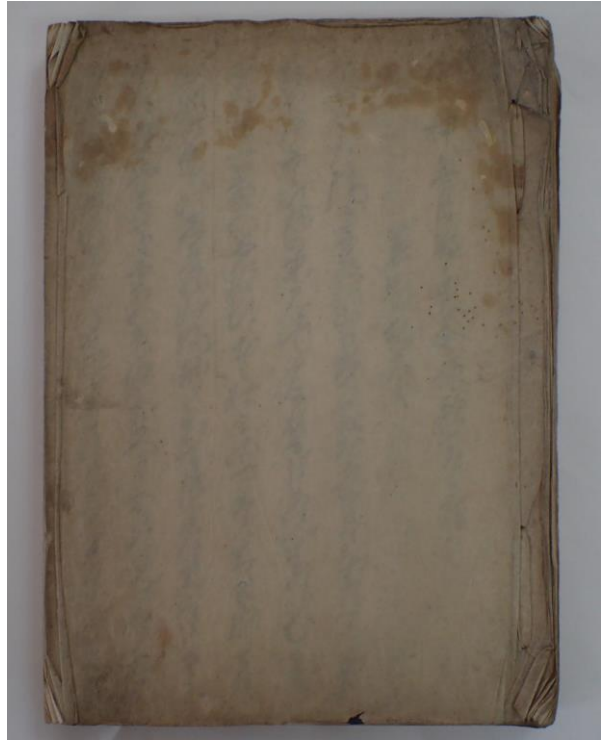


写真 1

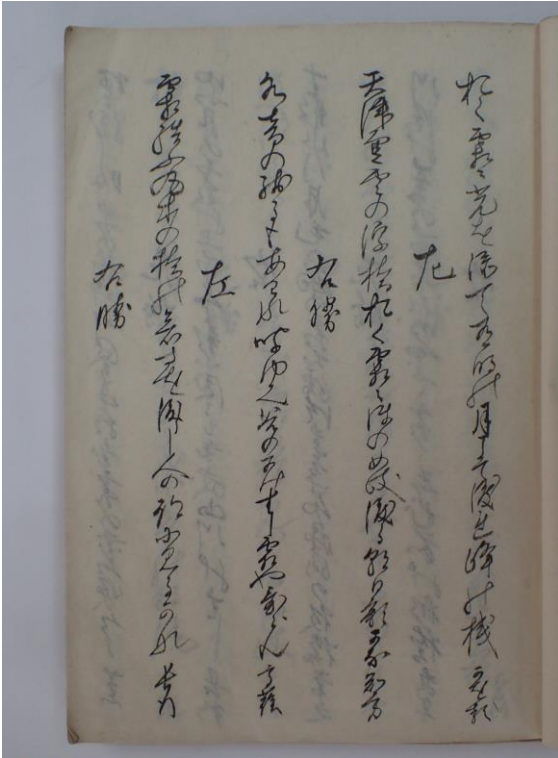


写真 2

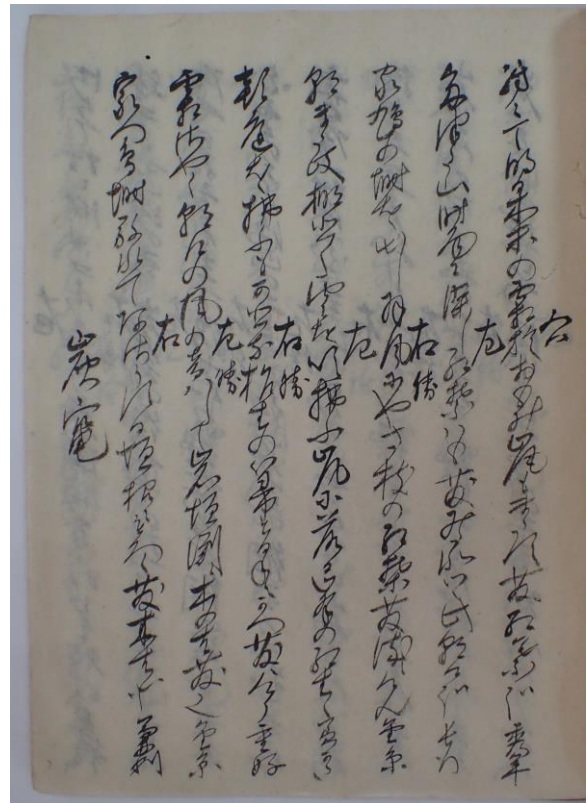


写真 3

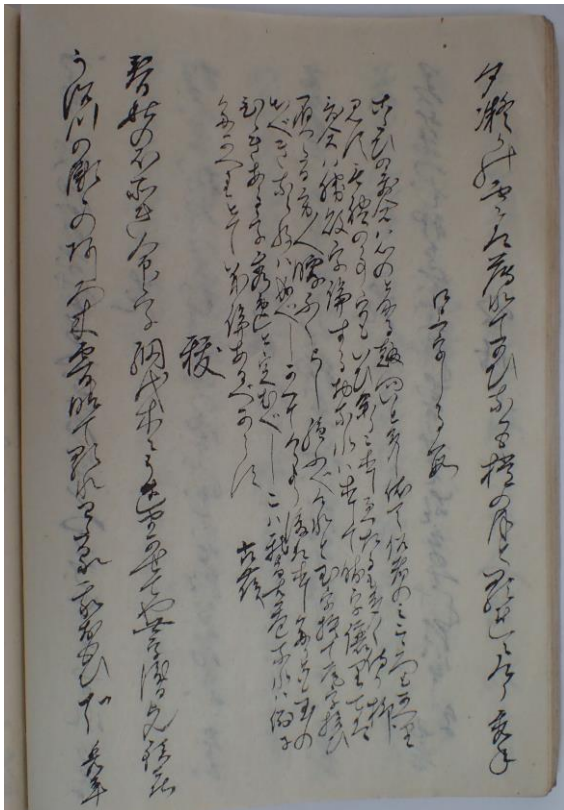


写真 4

【翻刻】『無題歌合集』

凡例

- 一 底本には、山陰歴史館蔵本（鹿島本家旧蔵）を用いた。
- 二 翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。
 - 1 歌頭に算用数字で和歌の通し番号を付した。
 - 2 読解の便宜を考慮して語の清濁や漢字の送り仮名を改めた。送り仮名を補った場合は、その仮名に傍点を付した（例 原文「待得てし」↓ 翻刻本文「待ち得てし」）。
 - 3 仮名の表記は現行の字体により、「ハ・ニ・ミ・ノ」等の片仮名表記も平仮名に改めた。また、歴史的仮名遣いと違うところは原文のままとし、「ママ」と傍記した。
 - 4 漢字の表現は、原則として通行の字体によった（俗字や略字は原則として用いない）。ただし、旧字・異体字などを部分的に残す（「嶋・浪・湊」などはそのままとする）。指示語や助詞・助動詞などの漢字もそのまま残した（「此」「哉」「也」など）。
 - 5 読みが難しいものに限って、最小限、漢字または漢語句の右傍に（ ）を付し、平仮名で読みを施した。
 - 6 繰り返し記号「ゝ」「く」は原文のままとしたが、濁音はそれぞれ「ゞ」「ぐ」で表記した。
 - 7 合字「ゑ」「お」は、それぞれ「こと」「より」に改めた。
 - 8 見せ消ちは底本では訂正する語句の左側に抹消記号「こ」を付し、その右側に訂正後の文字を本文よりやや小さく示しているが、本稿では抹消記号を二重抹消線で示した。（例 降雪つもる↓降雪る雪）
 - 9 翻刻の都合上、題・詞書は底本の記載形式に関わらず、和歌より二字下げとし、左注は三字下げとした。左注等の文章には句読点を付し、

改行は私意で改めた。

- 10 不審な箇所には「ママ」と傍記し、読解困難な箇所は「■」で表記した。底本の誤脱と思われる箇所については、稿末の【翻刻付記】に私見による改訂案をまとめて記している。

11 製版上の都合により、丁付はこれを記さなかった。

- 三 本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧、掲載をご許可いただいた山陰歴史館に深謝申し上げます。

1 神無月朔日略会詠歌青々庵

神無月朔日略会詠歌青々庵

兼題初冬

- 1 けふよりは風の音羽の山もみぢ散りみだれつゝ冬は来にけり 兼利
- 2 朝ぼらけ雲吹く風の末見えて雁がね寒し冬や来ぬらむ 日孝
- 3 霜結ぶ籬の菊のひと本に秋を残して冬は来にけり 古樹
- 4 山川の瀬ゞのしがらみ風越えて紅者流るゝ冬は来にけり 重好
- 5 今朝ははや千草に霜の色深みおのづからなる冬は見えけり 兼烈
- 6 きふけふ冬のしるしは大神の高ねに雪の见えて寒けし 建比古
- 7 大山の高ねのみ雪見え初めて時雨もしらぬ冬は来にけり 武彦
- 8 虫の音とゝもにかれふす荻の葉に霜見へ初マむる朝ぼらけ哉 常之
- 9 澄み渡る野寺の鐘のこゑ寒しあかつきかけて冬や立つらむ 豊正

秋時雨

閑居時雨

- 10 降る毎に夢路くできて槇の屋の時雨ぞものをおもはする哉 兼利

- 11 我が庵をもる月影も消え果てて時雨の外に問ふ人もなし 豊正
山家時雨
- 12 風ささぶ遠山里の夕ぐれは雲のかへしにまた時雨つゝ 日孝
田家時雨
- 13 冬されば鳴子もひたも繩朽ちて時雨音なふ小山田の庵 建比古
月前時雨
- 14 村時雨晴れみくもりみ冬の夜のさへ行く月は見る程もなし 同
風前時雨
- 15 風さそふ浮雲もれて赤星の光ほのかに時雨ふる也 常之
旅宿時雨
- 16 ふるさとの夢路たどりて小夜時雨過ぎ行くかたのなつかしき哉 重好
浦鶴啼月
- 17 浦山の梢放れて鳴く田鶴の声澄み渡る夜半の月かけ 豊正
寄太刀恋
- 18 思ふ事さやにも言はで枕太刀身のくるしさをいかに忍ばん 建比古
猿
- 19 物皆は人まねにしてひとつだになに得ざるこそなげき也けれ 古樹
蟹
- 20 こゝろにもあらぬ道行くあし蟹は足にやおのが身は引かるらむ 重好
夜風似雨
- 21 物おもふ窓の灯火打ちしめり嵐の音も雨とこそきけ 日孝
物おもふ窓の灯火打ちしめり嵐の音も雨とこそきけ

- 22 いつわりの心うづらばいかにせん命とたのむおのがかぐみに 常之
妓女対鏡
- 23 世ばなれし柴の庵の寂しさに友と聞きなす水の音哉 兼利
閑居水音
- 2 おなじく十九日略会 滄廼舎
おなじく十九日略会 滄廼舎
- 1 玉はやすむこのわたりの山風にうき雲たちて霰降る也 兼烈
兼題 霰
- 2 殿もりのかへる袂や寒からしゑびらにさやぐ玉あられ哉 常之
- 3 あら鷹の尾ぶさの鈴の音もさへて風にみだるゝ玉霰哉 日孝
- 4 さそひ来る風の霰のあらましく打ちおどろかす夜半ぞ寒けき 兼利
- 5 おし鳥の明けて別れし朝床の玉藻みだれて霰降る也 重好
- 6 烏なくなは手のかれき風見えて雲なき空に霰ふる也 古樹
- 7 小ざゝ原風のみならで降る音の暮れ行くものはあられ也けり 長行
- 8 村雲のつゝむとすれど月影もともにもれ来る玉霰かな 豊正
- 9 風さへて夜たゞあられの音羽川渡る間もなき夢の浮はし 建比古
湊千鳥
- 10 かやしまや沖吹く風のさゆるかしみなとにむれて千鳥啼く也 常之
枯野眺望

- 11 朝ぼらけ霜を千種の花と見て秋のかたみも残る野べかな 兼利
田水
- 12 垣内田をめぐりし水の音信もよそに隔てて薄氷にけり 日孝
(かきつた)
(おとづむ)
池鴨
- 13 池水の鏡に己が影見えてあさじあらしのあし鴨 兼烈
冬月
- 14 雲の波たちもさはがで冬の夜のみ船のさへ渡る見ゆ 建比古
瀧
- 15 雲まよふ岩ほの上にあらはれておちくるたきの末けぶる也 古樹
橋
- 16 雲水と流れ渡りてよのためにたてし誓ひの橋ばしら哉 日孝
旅行友
- 17 心からいそぐ旅路の行く先もおくれぬ友は杖にぞ有りける 兼烈
落葉煙
- 18 夕げたく千里のけぶり立つ里にあへて賑はふ世もしるき哉 兼利
草庵雨
- 19 霜をもる心のくまは解けにけり草の庵の夜のむら雨 常之
関
- 20 人すまぬ須磨の磯屋は荒れはてゝあらしの外に関守はなし 建比古
- 3 おなじく廿八日 略会 虎嘯軒くさぐさ 冬夜
- 11 おなじく廿八日 略会 虎嘯軒くさぐさ
- 12 寒夜衾 日孝
橋上霜
- 13 終夜降りしく橋のいたづらに渡るもおしき霜の色哉 冬人
(よもすがら)
水郷舟
- 14 ひをのよる川瀬の網代見る程は心してさせ宇治の柴船 兼烈
江寒芦
- 15 ふみしだくさぎのみの毛に霜散りて入江淋しき芦の一むら 古樹
炭竈
- 16 雪を吹く風は絶えて炭竈のけぶりにこもる松の一むら 常之
冬月
- 17 みだれふす野辺のかや生も霜白くおきめて月はさへまさる也 兼利
寒草
- 18 野辺見れば秋のかたみの色もなし霜の翁の草のみにして 建比古
早梅
- 19 春をのみ待つらん梅のほ末よりにほふは雪の花かあらぬか 重好
牛
- 20 家路だに忘るゝばかりはなれ牛なにゝ引かれていづち行くらむ 日孝
磯浪
- 10 こゝろなきいはほも磯の荒波にうもれながらの花はなしけり 冬人

- 11 冬されば窓のやつれに風見えて夜たゞ夢さへ破れ勝ちなる 兼烈
閑居夜雨
- 12 したぐりの音をしらずは窓の竹そよぐと 斗り聞きやあかさむ 古樹
海路日暮
- 13 和田の原船より外は果てもなし雲井もわかぬ夕暮の空 常之
旅宿
- 14 ふる里をおもふ心は誰しかも哀れはおなじ旅の枕に 兼利
川
- 15 大井川日毎にくだすいかだ士も花に棹さすおりは忘れじ 建比古
寄竹祝
- 16 世のかさは心にこめて呉竹のうれしきふしに見ゆる色哉 重好
雪
- 17 白妙の中にひとむれ色づきてあさる鳥の雪の明けぼの 兼烈
有明の月の空めは頃すぎて白雪深しみよしのゝ里 武彦
- 18 山鳥声のみ漏れて降る雪に 翔もたゆく打ち払ふらむ 日孝
- 19 みなと江やいそ輪の鴨の声さへて雪に成り行く出雲路の山 常之
- 20 鏡山峯の白雪みがけとやいづる月さへ光りそふらむ 兼利
- 21 めづらしと詠めし色も今はなし積もるやさかの雪の夕暮 古樹
- 22 降りへてとふ人まれに成りに 梟雪にこもれる竹の下窓 重好
- 23 吹きなびく風の姿もあらはれて雪に末ふす軒の村竹 長行
- 24 朝ぼらけさても有田の稻茎も鹿の子まだらに雪ぞ見へつつ 冬人
- 25 白妙に跡をしまれて立ち出でむ心もたゆむ雪の明けぼの 建比古
- 26 鳩のなく山ふところの檜だに花見へ初めて初雪ぞ降る 重固
- 27 霜月二日略会 日孝
- 4 霜月二日略会 日孝
- 霜月二日略会 日孝
兼題 埋火
- 1 みる夢は春にかよひて冬の夜の長きもしらぬ埋火の本 兼烈
- 2 冬ごもりかたらふこともこん春の思ひおこせる埋火の本 日孝
- 3 おもはずも夢と成りけり埋火をいく度となくかき起こす間に 重固
- 4 更け行けば閨の埋火かき絶えて渡るも寒き夢の浮はし 豊正
- 5 空だきの梅がゝかをる埋火にねぶりし猫の夢やいかなる 常之
- 6 かひなれし手さへ放れて唐猫の夜たゞねぶれる埋火の本 重好
- 7 さへまさる夜半にも有るか埋火のかしらの雪ははらひ尽くせど 兼利
- 8 空だきにしはしは春のこゝちしてゆめ長閑なる埋火の本 常之
- 9 かたるべき友ならねども埋火は寒き心のたのみ成りけり 兼利
- 10 霜さゆる閨のやつれの有明にとはれで寒き埋火の本 重好
- 11 雪ふれば籬もあれて白菊の俤にほふ埋火のもと 日孝
- 12 松風の音に心をすます哉おいの友なる埋火のもと 兼烈
- 13 ひとり守る閨の埋火小夜更けておく霜白くなるぞ寒けき 長行
- 14 冬田
鳴子には驚かされぬ小山田のおち穂になるゝむら雀哉 建比古

- 15 夕日影つたふ鳴子の繩朽ちておとせぬ冬は淋しかりけり 重好
 16 小山田に今は鳴子のかげもなしあさる鳥の声しげくして 兼烈
 17 刈り残す稲生(いねう)にくれて家鴨のあさる門田は霜がれにけり 常之
 18 水かれし田の面にあさる鳥さへおのがさまぐ見ゆる冬かな 兼利
 19 朝なぐ霜置きそひて小山田の庵もしどろに成りにけるかな 日孝
 20 刈り残す山田の稲葉風見えて影さへ渡る冬の夜の月 長行
 21 かり残す山田のかゝし老いぬればもるにかひなき雪の朝空 豊正
 遠村鶏
 22 ほどとふきこの野の末の鳥が音も風によせ来る朝朗哉 兼利
 23 山かげの松原こしに里見えて鶏が音遠き朝ぼらけかな 長行
 24 遠くとも聞きもまがはぬ鶏が音に此の里までやあけむとすらむ 建比古
 25 はるけくてたつる朝けの影のなし聞く鶏が音やいづこなるらん 兼烈
 26 月影は小まつがうれにかくろひて鶏が音高き遠方の里 常之
 27 遠方やしみ立つ杉のひまもれて里は床しき鶏のこへかな 日孝
 28 朝けたつ遠(ひぢ)の一村ほの見えて明けんと告ぐるくたかけのこへ 豊正
 29 夜ごもりにうたふやいづら庭つ鳥声のみもる松の一むら 重好
 5 兼題橋上霜 古蔭撰
 兼題橋上霜 古蔭撰
 1 影渡す橋より外は霜もなし朝日や松の木がくれにして 鎮喜
 2 右勝
 2 杣人ははや渡りけん朝霜に後こそ見ゆる谷の柴はし 重矩
 3 左持
 3 赤星の光こぼるゝ霜の上に波風さゆる淀の大はし 常之
 4 右
 4 都人と渡り捨てし八ツ橋の後なつかしき霜の色かな 重好
 5 左
 5 月さゆる山裾川の朽木橋霜なく夜半は人影もなし 尊蔭
 6 右勝
 6 かたおかのふるの板橋白妙に朝けの霜やかけかふるらむ 知方
 7 左勝
 7 有明の月かと思れば橋の上に霜置きそえる朝朗(あさほろ)かな 房則
 8 右
 8 ゆきかよふ人もと絶えて板ばしに今朝さえわたる霜の色哉 鎮喜
 9 左勝
 9 むさゝびの鳴く音落ち来る谷川の黒木の橋に霜さゆる也 秀年
 10 右
 10 さよ更けてひとり行く野の小板橋渡るも寒し霜や置くらむ 豊正
 左

- 11 あらし吹く音ばかりして更くる夜の月さへ渡る霜の板ばし
右勝 房則
- 12 とふ人もなくて朽ちぬる棚橋の置く霜白く也にけるかな
左 重固
- 13 橋ばしや人もかよはぬ霜の上にさむけく渡る朝嵐かな
右勝 兼利
- 14 おく霜に光を添へて有明の月こそ渡れ峰の棧 かをる
左
- 15 天津空雲の浮橋おく霜にほのめき渡る朝日影かな
右勝 知方
- 16 水音の残るもあわれ聞こゆ也谷のかけはし霜や置くらん
左 尊蔭
- 17 霜結ぶ丸木の橋の危ふさを渡りし人の後に見るかな
右勝 長行
- 18 あと絶えしふし木の橋のふしぎにも今朝置く霜の花は咲きけり
左持 薫
- 19 ゆふ月の霜の上なる雲影に渡るも寒き山川のはし
右 長行
- 20 はなれ行く月毛の駒の霜を踏むつま音さゆる野路の板橋
左勝 常之
- 21 川添ひの松の木かげは明けやらで霜よりしらむ前の棚橋
右 秀年
- 22 さへし夜のほどはしられて朝霜の色見へ初むる野辺の岩橋
兼利
- 23 谷川の黒木の橋の霜の上を渡りかねてやしとゞ鳴くなり
左勝 鎮喜
- 24 さへ渡る夜にも有るか遠方の霜の橋へ見ゆる寒けき
左勝 長行
- 25 梓弓矢はぎの橋の霜の上を早くも渡る冬の朝風
右 重矩
- 26 千代かけておき渡すらし竹橋のふしめさやかに見ゆる霜哉
左 重好
- 27 さざ浪や志賀の大曲浦照る月に霜さへ渡る瀬田の長橋
右勝 薫
- 28 我が門のひとつ棚橋霜ちりて此の河下の音ぞかれぬる
ぬき八首 重固
- 29 谷川の黒木の橋の霜の上に先づ後つけてしとゞ鳴く也
赤星の光こぼるゝ霜の上に川風さゆる淀の大はし 鎮喜
- 30 我が門の一つ棚橋霜ちりて早瀬の水も音かれにけり
梓弓矢はぎの橋の霜の上を早くも渡る冬の朝風 重矩
- 31 みやこ人とわたり捨てし八ツ橋の跡なつかしき霜の色哉
杣人やまだき渡りし朝霜に跡こそみゆれ谷の柴橋 重矩
- 32 とふ人もなくて朽ちぬる棚橋に置く霜白き朝ぼらけかな
逸 川添ひの松の木蔭は夜深きを霜こそしらめ前の棚橋 重固
- 33 秀年
- 34 兼題鷹狩 古蔭喜蔭両撰
- 6

兼題鷹狩 古蔭喜蔭両撰

左勝

1 とさけびに落ち来る鷹の鈴の音も溢れて寒き雪の上哉 鎮喜

右

2 鈴の音も雲井はるかに飛ぶ鷹のみ末の鳥やいづれ成るらむ 薫

左勝

3 吹く風も鳥立(とたむ)におなじ音はして猶かりくらき小野マしの原 兼利

右

4 狩りくらし弓張月の影見えてあすもまとぬの鷹やはなたん 知方

左勝

5 降る雪に鳥立かきくればし鷹の声のみきほふ朝朗哉 常之

右

6 ますらをがこへマを放れて飛ぶ鷹の羽風身にしむみかり野の原 尊蔭

左勝

7 枯れたてる芒マ霜ちる夕風にみだれて寒しはし鷹の声 重好

右

8 大原にけふかりくるゝ名残とや小しほの山に雉子きす鳴く也 房則

左持

9 はなちやる鷹の行方マお見るが内に雪吹立かきつ也小野しの原 尊蔭

右

10 暮れをらしみ今ひとたびとはなちやるつかれの鷹は風に流るゝ 兼利

左

11 鈴の音もともにあまぎる白雪はしらふの鷹の影にや有るらし 薫

右勝

12 荒鷹のすゝむ心もたゆみてや雪吹の末に声ぞ落ち来る 重好

左

13 あはせつる鳥の行方はかきくれて雪吹きしきる小野の枯れ原 常之

右勝

14 はなちやる鷹の尾ぶさの鈴の音も雪吹にたへぬみかり野の原 知方

左

15 はし鷹の遠見を立つるけふはとて猶やわけ入るかた岡の山 房則

右勝

16 荒鷹の空飛ぶ風に片岡の尾越の松は雪散りにけり 鎮喜

左

17 かきくらししるしの鈴の音絶えぬ雪のいづこにきみやしぬらん 日孝

右勝

18 狩り捨てて鷹飛ぶ空の夕曇り野山は雪の降りつもるらし 重固

左持

19 鈴が音も雲井に絶えて白鷹の尾越の山にみ雪降るなり 同

右

20 若鷹のいまはときほふたふるひに鳥ふし原に風さわぐ也 薫

左勝

21 狩りくらしみ雪降る野は手にすゆる白ふの鷹の色も寒けし 鎮喜

右

22 狩りくらし手に引きすゆるはし鷹の羽風も寒き野辺の夕暮
繁材

左勝

23 こての上につかれて帰るはし鷹のさか羽みだれて夕風ぞ吹く

尊蔭

右

24 荒鷹の時待ちかねしゆきとりに吹雪立つ也柴の下道
薫

抜 古蔭

25 狩りくらしみ雪降る野は手にすこる白ふの鷹の色も寒けし
鎮喜

26 若鷹の鈴が音さほふ曙に鳥のふし原風さわぐ也
薫

27 吹く風のおとも鳥立の心地して猶狩りくらす小のしの原
兼利

28 狩りくらし鷹呼ぶ空の薄曇り野山は雪の降りつもるらし
重固

29 降る雪に鳥立かきくればし鷹の声のみさほふ朝朗かな
常之

30 放ちやる鷹の行へも搔き暮れて雪吹立つ也小のしの原
尊蔭

31 暮をししみ今(ひと)よりと放ちやるつかれの鷹は風流れせり
兼利

32 鈴が音も雲井に消えて白鷹の尾越の山にみゆき降る也
重固

33 こての上につかれて帰るはし鷹の逆羽みだるゝ夕風哉
尊蔭

34 鳥さけびにきほへる鷹の鈴のねも溢れて寒き雪の上哉
鎮喜

右九首めでたく侍り。尤も群を抜き出でたるは次の鳥さけび也。

35 こての上につかれて帰るはし鷹のさか羽みだるゝ小野ゝ夕風
尊蔭

喜蔭ぬき

36 荒鷹のすゝむ心もたゆみてや雪吹の末に声の落ち来る
重好

37 をすゝきのかれふ霜ちる夕風にみだれて寒しはし鷹のこゑ
同

38 ますらをが声を放れて飛ぶ鷹の羽風身にしむみ狩のゝ原
尊蔭

39 夕かりに今ひとたびとはなちやるつかれの鷹ぞ風に流るゝ
兼利

40 とさけびに落ち来る鷹の鈴が音も溢れて寒き雪の上哉
鎮喜

7 兼題閑居夢 古蔭撰

兼題閑居夢 古蔭撰

左持

1 遁れすむまくらの山に花鳥の夢なぐさむる夜半も有りけり
薫

右

2 とひきぬと見えつる人は夢路にて枕の山に月更けにけり
秀年

左勝

3 あれまさる笹の庵に世をしめて夢にもならず風の音哉
常之

右

4 寐覚めけり見はてぬ夢の跡とへば嵐は峰の月に吹くなり
尊蔭

左

5 塵つもる心のうちに折くはけふ九重の夢を見るかな
鎮喜

右勝

6 千さと行く夢路も絶えて小夜深き律の宿に嵐吹く也
繁材

左勝

7 八重むぐらしげれる宿も折くは夢路よりこそ世に通ひけれ
日孝

右

8 月かげにとはるゝのみの庵哉浮世にかよふ夢は見つれど
長行

上下の例の連哥の如く聞こへて只理屈のみ也。風韻風概

- かくては言ひがたし。
左勝
- 9 夜もすがら風に問はるゝかくれ屋は夢も浮世にかへりやはする
兼利
- 10 たちかへり又も浮世にすむと見し夢の末吹く朝の松かぜ
左持 薫
- 11 のがれすむ心のままの手枕にうしと見し夜の夢や何也
右 常之
- 12 人しらずすめる枕の夢ながら三つの友にはあはぬ夜ぞなき
左勝 秀年
- 13 遁れこし心の外の夢路のみ浮世にかよふ夜半も有りけり
右 繁材
- 14 世をいとふ窓の灯火影消えて見はてぬ夢も淋しかり覺
左持 長行
- 15 住みわぶる我が心より塵の世の哀れを猶もむすぶ夢かな
右 兼利
- 16 塵つもる朽ちばに道はたゆれども夢は浮世に通ひつる哉
左持 鎮喜
- 17 淋しさをなぐさめとてや隠れ家の夢にも結ぶ月花の友
右 兼利
- 18 浅茅生のまがきも夢のかよひ路も降りこそ埋め夜半の白雪
左 常之
- 19 花鳥の夢もとだえて笹がにの糸より細きすまひ也けり
右勝 鎮喜
- 20 松風の音のみかよふ枕には結ぶ夢さへ塵なかりけり
左 秀年
- 21 住みなれし蓬がおくは夢路さへおのが心にまかせてぞゆく
右勝 薫
- 22 夢にだに心をわぶる隠れ家はかことがましき小夜嵐哉
左持 兼利
- 23 のがれすむ竹のまがきもあれはてゝ浮世の夢もまばら也けり
右 常之
- 24 ともすれば清き流れにかくれかな捨てし浮世の夢のうきはし
抜 古蔭 薫
- 25 のがれこし心の外の夢ばかり浮世にかよふ道は有りけり
終夜風にとはるゝ隠れ家は夢も浮世にかへらざりけり
とひ来ぬと見えつる人は夢路にて枕の山に月更けにけり
のがれすむ心のまゝの手枕にうしと見しよの夢や何也
のがれ住む枕の山は月花の夢なぐさむる夜はも有りけり
荒れまさるさゝの庵に世をしめて夢にも侘ぶる風の音哉
住みわぶる我が心より塵の世の哀れを結ぶ夢も有りけり
散りつもる朽葉に道は絶ゆれども夢は浮世にかよひのみして
- 26 繁材
27 秀年
28 常之
29 薫
30 常之
31 兼利
32 鎮喜
- 33 松風の音のみかよふ枕には結ぶ夢路も塵なかりけり
秀年
- 34 のがれすむ竹の籬も荒れはてゝ夢路さへこそまばら也けり
常之
- 35 谷川の清き流れにかくる哉すてしうきよの夢のうきはし
逸 人しれず結ぶ枕の夢ながらみつの友にはあはぬ夜ぞなき
秀年

8 兼題馬 古蔭撰

兼題馬 古蔭撰

- 1 ますらをがいさむとしらせ乗る馬にあだ追ひ崩す力をぞしる 常之
右
- 2 ますらをのたけけ^マ心のしられてや鞭をもまたずすむ黒駒 薫
左
- 3 ますらをの鞭打ちすむつるぶちは雲井をさして飛びきほふらん 鎮喜
右勝
- 4 いたづらに手縄はとらじ君がため心を乗する鶴ぶちのこま 日孝
左勝
- 5 ますらをがたけき心をこゝろにてまきの荒駒鞍なれにけり 尊蔭
右
- 6 千里行く心も絶えて荒駒のなるもやさし子らが袂に 重好
左
- 7 朝げたく杉の一村声もれていななく馬やいづこ成るらむ 長行
右勝
- 8 打つむちにいななき高きあを馬のいそぐ道さへ暮れがたにして 宗武
左持
- 9 手なれせし月毛の馬に鞭とりて雲に飛ぶべき力をぞ見る 重固
右
- 10 むれあそぶをぶちの駒をなつつけつ千里行くべくわれは成すらん 国常
- 11 事あればすみつきつますらをのたなれの駒や命なるらん 薫
左持
- 12 若草のもゆる野の辺の放れ駒誰が打つ鞭になびきゆくらん 国常
左勝
- 13 朝日さす小松が原にあらはれていななく駒やいづちひくらむ 日孝
右
- 14 賤の女がかる手の草に我が駒も心引かる野辺の通ひ路 長行
左持
- 15 こと国のあだこと聞かば我が馬のひづめにかけて追ひやちらさむ 常之
右
- 16 朝日さす霞が関の大御門行きちがふ駒のたけくも有るかな 尊蔭
左勝
- 17 久かたの月毛にかゝる隈なしてをぶちの駒はいつか^マてきけん 重好
- 18 あしがらや箱根をのぼる龍の馬のゆふ髪白くあらし吹く也 定遠
右
- 19 乗りすむ月毛の駒に影見えてすき乱る秋の夕暮 鎮喜
右勝
- 20 乗る駒の雪の降る道ふみわけし後こそ見ゆれふみの林に 常之
左
- 21 鞭うてば千里行くべき荒駒の心やさしくかひなづみけり 尊蔭
右勝

- 22 つながれしおもひやいかに鶴ぶちは雲井の月毛こひしからなん
薰
- 23 朝日さす霞が関の大御門出で入る駒の声のどかなり 尊蔭
拔
- 24 朝日さす小松が原に踞れていなゝく駒はたれか引くらむ 日孝
- 25 一鞭にかけ行く駒の足なみにあだ追ひ崩す力をぞしる 常之
- 26 鞭うてばいなゝき高き青馬のいそぐ道さへ暮れがてにして 宗武
乗る駒の雪のふる道ふみ分けて跡こそ見ゆれふみのはやしに
- 27 常之
- 28 つながるゝひなの 駅(うまど)の鶴ぶちは雲井の月やとはに恋しき 薰
- 29 いたづらに手縄はとらじ君がためならせばなるゝ鶴ぶちの駒 日孝
- 30 久かたの月毛にかゝるくまなしてをぶちの駒はおひ立ちにけり 重好
- 31 諸口にかへる手縄を取り直しうてども行かぬ駒は何せむ 古蔭
おのれ伯楽にはあらねど其の足並みを見て
- 9 兼題 冬暁月
兼題 冬暁月
左持
- 1 しらみ行く浅茅が原の霜の上に影もこほれる有明の月 兼利
右
- 2 山鳥雪うちはぶく一声にしらみ果てたる有明の月 日孝
左
- 3 空にさえ真砂にさえて月かげの色も身にしむ霜の曙 房則
右勝
- 4 空のうみの深きみどりに影さえて霜に明け行く冬の夜の月 かをる
左勝
- 5 霜の上に影しらみ行く有明の月の末吹く山おろしのかぜ 鎮喜
右
- 6 朝ぼらけ垣内の松の霜の上に影うすれ行く有明の月 長行
左持
- 7 はし鳥ママの夜床はなるゝ声の上につれなくさゆる有明の月 常之
右
- 8 起き出でて月と雪との面見ればまだ夜ながらの鳥は嘯く也 重固
左
- 9 雪に埋む松より外は果てもなし光りまばゆき在明の月 常之
右勝
- 10 あらし吹く野路の松原月さえてあかつき寒き雪の色哉 宗武
左
- 11 山鳥寐覚の床や寒からし雪の高ねの有明のつき 日孝
右勝
- 12 月かげに秋のかたみも有明の霜の花なす萩のかれ原 房則
左持
- 13 おく霜のかぎりしぐるゝ鐘の音に月もさへ行く朝ぼらけ哉 兼利
右
- 14 呉竹も霜に葉だれし明けがたの月より外は色なかりけり かをる
左勝
- 15 夢覚むる枕の山に風さえて月も身にしむ暁のそら 長行

- 16 右
我が袖の露をや月の尋ぬらん霜さえ渡る曙の空 日孝
左勝
- 17 さえ渡るあらしは絶えて笹の葉の霜よりしらむ有明の月 常之
右
- 18 ひえ鳥の羽ぶきも寒く明けわたる梢にしらむ冬の夜の月 宗武
左勝
- 19 しらみ行く月は雲井にかたぶきて暁寒し霜やみつらむ 鎮喜
右
- 20 ひえ鳥の羽ぶき出でつる山影の暁月夜誰か見るらむ 重固
左
- 21 とめしびのひかりけたるゝ小簾のとしらむも寒き有明の月 常之
右勝
- 22 しとゞ鳴く笹の籬の霜さえ影かたぶきぬ在明のつき かをる
抜七首
- 23 空の海の深き緑に影冴えて霜に明け行く冬のよの月 薫
月清み秋のかたみも有明に霜の花ちる萩の枯原 房則
- 24 山鳥雪打ち羽ぶく一声にしらみはてたる有明の月 日孝
おく霜のかぎりしらるゝ鐘の音にくだけてさゆる月の影かな 兼利
- 25 起き出でて雪にしらめる月見ればまだ夜ごもりの鳥が音ぞする 重固
- 26 呉竹の葉だれ霜ふる明けがたは月より外の色なかりけり 薫
逸をし鳥の夜床別るゝ声の上につれなくさゆる有明の月 常之
追加

30 薄はら夜の霜こそ深からし残れる月も栲の穂にして 古蔭

【翻刻付記】

神無月朔日略会詠歌青々庵

4歌 四句「紅者流るゝ」——本来、「紅葉」と表記すべきところだが、『無題歌合集』の書写者・鹿島長行は「もみぢ」を「紅者」、「もみぢば」を「紅者」と表記している例がしばしばみられる。

おなじく二十八日略会 虎嘯軒くさぐさ

16歌 初句「世のかさは」——「世のうさは」の誤りか。

霜月二日略会 日孝

22歌 初句「ほどとふき」——「ほどとほき」の誤りか。

27歌 四句「里は床しき」——「里わ床しき」の誤りか。

兼題鷹狩 古蔭・喜蔭両撰

2歌 四句「み末の鳥や」——「み末」は「見据ゑ」の当て字か。

3歌 四句「猶かりくらき」——「猶かりくらす」の誤りか。

20歌 三句「たふるひに」——「はふるひに」の誤りで「羽振るひに」の意か。

24歌 三句「ゆきとりに」——「ゆふかりに」の誤りか。

25歌 三句「手にすこる」——「手にすうる」の誤りか。

兼題閑居夢 古蔭撰

24歌 三句「かくれかな」——「かくるかな」の誤りか。

兼題馬 古蔭撰

17歌 五句「いつかてきけん」——「いついできけん」の誤りか。

兼題冬暁月

7歌 初句「はし鳥の」——「をし鳥の」の誤りか。

21歌 初句「とめしびの」——「ともしびの」の誤りか。